

(様式 3 号)

## 学 位 論 文 の 要 旨

氏名 東 良 紘

### 〔題名〕

Utility of soluble CD163 in the clinical management of patients with Kawasaki disease  
(川崎病患儿に対する治療管理における可溶性 CD163 の有用性)

### 〔要旨〕

グロブリン静注療法 (Intravenous immunoglobulin, 以下 IVIG) は川崎病の治療における第一選択である。しかし IVIG 不応の症例が 10~20% 存在する。本研究の目的はマクロファージ活性化マーカーとしての有用性が報告されている soluble CD163 (以下 sCD163) の IVIG 反応性予測マーカーとしての有用性を検討することである。

2005 年 1 月から 2015 年 12 月まで山口大学医学部附属病院小児科で治療した川崎病患儿 87 例を対象とした。川崎病の診断は川崎病診断ガイドライン第 5 版に基づいて行った。更に 87 例を Group A: 初回 IVIG 反応群 (n=61), Group B: 追加 IVIG 反応 (初回 IVIG 不応) 群 (n=15), 及び Group C: 追加 IVIG 不応群 (n=11) の 3 群に分けた。初回 IVIG 投与前, 一部は初回 IVIG 後の患者血清を用いて血清 sCD163 濃度を測定し, 更に診療録から得た血算, 血清ナトリウム, AST, ALT, CRP, 及び血漿 D-dimer 濃度を比較し臨床的な有用性を検討した。各群の血清 sCD163 濃度の中央値 (四分位範囲) は Group A, 699 (478-1,072) ng/mL; Group B, 1,349 (1,116-1,390); 及び Group C: 665 (544-1,094) であった。血清 sCD163 濃度は AST 及び ALT と有意な相関を示した。3 群間において Group B は最も高い血清 sCD163 濃度を示した。(vs. Group A,  $p < 0.001$ , vs. Group C,  $p = 0.035$ )。Group A は初回 IVIG 後に有意な血清 sCD163 濃度の上昇を認め, 他の 2 群に有意な変化はなかった。これらの結果から血清 sCD163 濃度は川崎病における治療管理に有用であり, 特に追加 IVIG 反応性の予測マーカーとして有用である可能性が示唆された。

### 作成要領

1. 要旨は、800字以内で、1枚でまとめること。
2. 題名は、和訳を括弧書きで記載すること。

(様式9号)

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1580 号	氏 名	東 良 紘
論文審査担当者	主査教授	田 邊 剛	
	副査教授	木 村 和 博	
	副査教授	長 谷 川 俊 史	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
Utility of soluble CD163 in the clinical management of patients with Kawasaki disease (川崎病患児に対する治療管理における可溶性CD163の有用性)			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
Utility of soluble CD163 in the clinical management of patients with Kawasaki disease (川崎病患児に対する治療管理における可溶性CD163の有用性)			
掲載雑誌名 Frontiers in Pediatrics <a href="https://doi.org/10.3389/fped.2020.00148">https://doi.org/10.3389/fped.2020.00148</a> (2020年4月掲載)			
(論文審査の要旨)			
<p>グロブリン静注療法 (Intravenous immunoglobulin, 以下 IVIG) は川崎病の治療における第一選択である。しかし IVIG 不応の症例が 10~20%存在する。本研究の目的はマクロファージ活性化マーカーとしての有用性が報告されている soluble CD163 (以下 sCD163) の IVIG 反応性予測マーカーとしての有用性を検討することである。</p> <p>2005年1月から2015年12月まで山口大学医学部附属病院小児科で治療した川崎病患児 87 例を対象とした。川崎病の診断は川崎病診断ガイドライン第5版に基づいて行った。更に 87 例を Group A: 初回 IVIG 反応群 (n=61), Group B: 追加 IVIG 反応 (初回 IVIG 不応) 群 (n=15), 及び Group C: 追加 IVIG 不応群 (n=11) の 3 群に分けた。初回 IVIG 投与前、一部は初回 IVIG 後の患者血清を用いて血清 sCD163 濃度を測定し、更に診療録から得た血算、血清ナトリウム、AST、ALT、CRP、及び血漿 D-dimer 濃度を比較し臨床的な有用性を検討した。</p> <p>各群の血清 sCD163 濃度の中央値 (四分位範囲) は Group A, 699 (478-1, 072) ng/mL; Group B, 1, 349 (1, 116-1, 390); 及び Group C: 665 (544-1, 094) であった。血清 sCD163 濃度は AST 及び ALT と有意な相関を示した。3 群間において Group B は最も高い血清 sCD163 濃度を示した。 (vs. Group A, <math>p &lt; 0.001</math>, vs. Group C, <math>p = 0.035</math>)。Group A は初回 IVIG 後に有意な血清 sCD163 濃度の上昇を認め、他の 2 群に有意な変化はなかった。これらの結果から血清 sCD163 濃度は川崎病における治療管理に有用であり、特に追加 IVIG 反応性の予測マーカーとして有用である可能性が示唆された。</p> <p>本研究は川崎病の病態における血清 sCD163 濃度の特徴や臨床的有用性を示し、追加 IVIG の予測マーカーとなり得る可能性をはじめ報告した論文である。</p> <p>よって、学位論文として価値のあるものと認める。</p>			
備考 審査の要旨は800字以内とすること。			